

時代背景

江戸幕府は鎖国政策を約200年以上続けていたため、日本は世界の動きから閉ざされていた。また、幕府は言論統制のため、もし幕府を批判する者がいると、重罪（死刑・無期懲役）としていた。このような時代の中で、高野長英は『日本の夜明け（近代化）』のために、生涯を捧げることになる。

高野長英は郷土岩手が生んだ幕末の先覚者。長崎の鳴滝塾でシーボルトに学び、抜群の語学力を生かして多くの蘭書を翻訳する一方、医者としての顔をあわせ持っていた、当代屈指の知識人。外国の情勢にも通じていたがゆえに、国の行く末を憂えて「夢物語」を執筆したものの、幕府による激しい弾圧が待ち受けていた。そして、脱獄、逃亡生活の果てに、その破天荒な生涯は、壮絶なクライマックスを迎える。

壮絶な最期と、 没後の名誉回復

46才の時、硝酸で顔を焼き、偽名を使い江戸青山百人町で町医者を開業する。1850年10月30日、捕吏に襲われ格闘の末に自刃（47才）。没後「正四位」を追贈された。



この肖像は長英の死後、高野家が東京の小林写真館に依頼して制作したもの。

幼少年時代

水沢に生まれ、9才の時に父が亡くなり、高野家の養子となった長英は、祖父と養父から学問の手ほどきを受ける。

江戸遊学時代

向学心に燃え、江戸へ（17才）。極貧生活や苦難が続くが吉田長淑の内弟子となり西洋内科を学ぶ。

長崎遊学時代

江戸から長崎へ渡りシーボルトの鳴滝塾に入門し（22才）、優れた言語力で頭角を現し、ドクトルの称号も得る。そこに、養父の死という報が届き、学問を続けるか帰郷するかで大いに悩む。

移動講座時代

シーボルト事件の後（26才～）、各地で集中講義と診療をし論文も著す。なお、手紙で水沢には戻らない決意を伝えた。

江戸開塾、尚歯会時代

27才の時、江戸麹町貝坂で「大観堂」と名付けた塾・医院を開業し訳述も行う。また、洋学に関心をもった者たちの集まりである「尚歯会」に参加し、大飢饉の対策案や外交策をテーマに研究した。

潜行時代

投獄されて6年後の6月30日の夜、牢屋敷の火事に乗じて脱獄（41才）。多くの知人や宇和島藩主に匿ってもらい、名前を変えながら各地を潜行。潜伏中も医業をし、天文学や兵書などの翻訳を続けた。

蛮社の獄

モリソン号事件を契機に、長英は幕府に外交方策を提言するため「夢物語」を執筆。ところが、この「夢物語」が幕府批判の罪に問われ投獄された（36才）。長英は投獄の不当・無実を訴え、赦免を求め続けるが認められなかった。

モリソン号事件

イギリス（実はアメリカ）のモリソン号が、漂流していた日本人7人を助けて送り届けに来航したが、幕府は鎖国政策に伴う「異国船打払令」により、モリソン号を大砲で打払った事件。

この事件を知った高野長英は『夢物語』の中で、幕府の対応は人道的でないとして、幕府の外交方策を批判した。